



バッハの森通信

第115号
2012年
4月20日発行

財団法人筑波バッハの森文化財団

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9

http://www.bach.or.jp

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699

e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 (財)筑波バッハの森文化財団



命をつなげる

苦しみを越える大きな喜び

このところ、バッハの森は一寸したベビーブームです。よく両親が連れて来る子が、4ヶ月と11ヶ月の赤ちゃんを含めて6人もいます。合唱練習中、外のロビーでおとなしくしている子もいますが、走り回っている子もいて、時に練習にちん入しますし、抱っこされている赤ちゃんが、お母さんと一緒になって「歌い」だすこともあります。しかし皆さん慣れたもので、練習に支障を来すことはありません。考えてみると、バッハの森は、いつもこんな風でした。ただ私自身が、バッハの森に来る子供たち、特に幼児とその母親の姿を意識するようになったのは最近のことです。ホステスだった一子がいなくなり、子連れ親と直接触れ合うようになったせいでしょう。それに、自分の子供を育てた経験がないので、今さらながら、妊娠、出産、子育てというプロセスを、やや離れた立場からとはいえ、新鮮な感動をもって見つめています。

* * *

先日、新米のお母さんが、「子供を産んで育てていると、聖書が分かった、という経験をします」と話してくれました。この言葉には説明が必要でしょう。彼女は、バッハの森で長年一緒に聖書を読んできた仲間の一人です。この読書会では、確かに、大昔の聖書の世界の歴史や言語、宗教や文化については私が説明しますが、解釈については、参加者各自が、自分で考え、自由に発言することが求められています。

その結果、聖書という書物には、いろいろな状況に応じて必死に生きた人間の姿が、実にリアルに報告されており、それが聖書の面白さだということが共通理解になってきたと思います。要するに、聖書は、人間とは何だろうという疑問に、いろいろな答えを出してくれます。それを教義的な

固定観念にとらわれず、むしろ自分の経験を通して素直に受け止めると、人間の様々な姿が生き生きと見えてきます。

日々成長する赤ちゃんの姿には、必死になって生きる人間の原型があります。ですから、赤ちゃんを見ていると、誰でも、特に母親は、命の不思議とか、自分も初めはこうだったのかとか、いろいろな感慨を抱くはずで、幼児を育てていると「聖書が分かった」という彼女の話も、私は理解できます。

* * *

最近、私も「聖書が分かった」と思ったことがあります。最初の男と女が、禁断の知恵の木の実を食べたため、神は女に「お前の産みの苦しみを大きくする」と告げ、男に「お前は顔に汗してパンを得、(結局)土に返る」と宣告して、彼らをエデンの園から追放した、という有名な箇所を読み直したときのことで、この物語に基づいて、すべての人間は最初の人(アダム)の罪を継承して死すべき存在になった、というキリスト教の教義に影響されて、私も、原罪論はともかく、この物語は「死の起源」に関する説話だと思っていました。

ところが、妊娠と出産と子育てに励むお母さんたちを見ていると、果たして「産みの苦しみに」は神罰なのか、と考えてしまいました。そこで何人かのお母さんたちに訊ねてみると、勿論お産は苦しかったけれど、その後の喜びがはるかに大きいので、苦しさは忘れてしまう、と皆さんが答えてくれました。それなら「死」を越える喜びもあるはずで、

男が汗して食料を獲得し、女が苦しんで子供を産み育て、男女共いずれ死んで土に返るけれど、命をつなげる喜びに生きる、という生活が、楽園の外で暮らす人間のあるべき姿だ、と聖書は語っているようです。こういう聖書の自由な読み方とバッハの関係は、私たちと一緒に聖書を読んでくだされば分かります。バッハも聖書も限りなく面白いですよ。皆様のご参加をお待ちしています。

(石田友雄)

命の連鎖

他の命を生きかすために死ぬ命

*これは創立記念コンサート「受難物語」(2012年3月20日)で朗読した「解説」と「メディタツィオ」の改稿です。

過ぎ越しの小羊

今から約2000年前、紀元30年頃、ユダヤ人の春の大祭、過越祭の間に、エルサレム郊外の刑場ゴルゴタで、ナザレのイエスは十字架につけられて処刑されました。このとき、どのような経緯で彼が処刑されたかという報告が「受難物語」です。

「受難物語」は4福音書の終わりの方に収録されていますが、福音書は更に続けて、十字架上で絶命して近くの墓に葬られたイエスが、3日後に復活して弟子たちに現れたという物語を報告し、この出来事がキリスト教の始まりになったことを伝えます。このとき弟子たちが経験したと証言するイエスの復活は、いかにも超常現象のようですが、それが実際にどのようなことだったのか、推測してみても余り意味がありません。むしろ重大なことは、イエスが処刑されたとき四散した弟子たちが再び集まって、イエスは本当にメシア、すなわちキリストだったと、(旧約)聖書に基づいて説明し始めたことです。それは、何でメシアが、このような悲惨な最期を遂げなければならなかったのか、という疑問に対する回答でした。

こうして、イエスが十字架の上で流した血は、過越祭の犠牲の小羊の血と類比されて説明されるようになりました。「キリストは私たちの過ぎ越しの小羊として屠られた」と、イエスの死の約20年後にパウロが書き残しています。過越祭は、紀元前13世紀頃、エジプトで奴隷の苦役に苦しんでいたユダヤ人の先祖が、祖先の神によって救い出されたとき、入り口に小羊の血を塗った人々の家だけ、死神が「過ぎ越し」という伝承に基づく春の大祭です。

選民ユダヤ人の先祖の命を救った過ぎ越しの小羊のように、イエスは十字架上で犠牲となり、その血によって、彼をメシアと信じる人々を死から救い出して命を与えたと、イエスの弟子たちは彼の十字架の死の意味を説明したのです。

会衆が参加するドラマ

過越祭の後の日曜日を、イエスの復活を記念する「復活祭」、その3日前の金曜日をイエスの死を追憶する「聖金曜日」に定めたのは後の教会ですが、すでにイエスの直弟子たちが、これらの日に特別な礼拝を捧げていたことは十分に推測できます。特に聖金曜日に、イエスが処刑されるまでの経緯を語り伝える慣習は、最初からあったはずで、この語り伝えが収集編集されて「受難物語」になりました。

4冊の福音書の「受難物語」は、大筋は一致していますが、細部は大分相違しています。今回は「ヨハネによる福音書」とその「受難曲」を用いました。ただし、プロローグは、ろばの子にまたがってエルサレムに入城したイエスを、群衆が棕櫚の葉を振って迎えた、受難週の最初の出来事をテーマとするカンタータから抜粋した合唱です。また、ヨハネによる福音書では、「最後の晩餐」の席で、イエスが長い告別の言葉を語るの、ヨハネによる受難曲と同じように、マタイが伝えるような「最後の晩餐」の場面は省略しました。そこで、本日語る「受難物語」は、木曜日夜から金曜日夕方までの約24時間に、ゲッセマネの園、大祭司邸、ローマ総督官邸、ゴルゴタの丘、とイエスが移動した8場面から構成されています。

1) プロローグ (最後の晩餐)	週の初めの日 木曜日 夕方
2) 裏切りと逮捕	夜
3) 大祭司の審問	真夜
4) ペテロの否認	金曜日 明け方
5) ピラトの審問	朝
6) 兵士の嘲笑とピラトの権限	午前
7) 裁判とゴルゴタの刑場	正午～
8) 十字架上のイエス	午後～
9) イエスの埋葬	夕方

「受難物語」は、最初から、各場面の状況を説明する語り手と、各登場人物の言葉をそれぞれの担当者が朗読するドラマの形式で、聖金曜日の礼拝に集まった信徒に読み聞かされたと思われます。やがてこの朗読の中に、会衆が直接参加するようになりました。会衆は、「受難物語」の朗読を第三者的に聞く聴衆とは違って、彼らもまたこの特別な礼拝の参加者だったからです。ですから、彼らには、各場面の朗読が終わるたびに、その場面に関する特別な思いが湧き起こり、どうしてもその思いを表現したくなかったはずで、これが、最終

的に「受難物語」が音楽化されて「受難曲」になったときに、各場面の締めくくりとして歌われる会衆歌、すなわち、コラールの始まりです。本日も、原則として、各場面の終わりにコラールが歌われます。その個所に来たら、皆様、どうぞ一緒に歌ってください。そうすることにより、ナザレのイエスの最後の2日間の劇的な出来事を追体験しながら、「受難物語」が伝える感動を、より深く味わっていただけたと思います。

命の連鎖を破る人間

初めに述べたように、ナザレのイエスの受難は、今から約2000年前にエルサレムで起こった出来事です。しかも、その意味を説明するために、イエスの弟子たちは、更に千数百年前のエジプト脱出のときに犠牲になった小羊のエピソードを持ち出してきました。時代も、場所も、そして文化的背景も、私たち現代の日本人には余りにも遠い出来事です。ですから、このような異文化の世界で成立した「受難物語」を理解するためには、当然、多くのことを学ばなければなりません。

それにもかかわらず、「受難物語」には、異文化研究をしなくても、民族や文化、さらには時代の違いまで乗り越えて、すべての人々に感動を与える普遍性があります。その主要なテーマが、人の命が生きるためには、他の命が死ななければならない、という普遍的な真理だからです。この点、死神の侵入を防ぐため、その血を家の入り口に塗るため犠牲にされた過ぎ越しの小羊の例は、分かり易いエピソードです。実は昔から世界各地の人々は、動物はもとより植物であっても、すべての食物には命があり、それを食べて生きる、命の連鎖に自分の命が支えられていることを自覚し、食物となる他の命に畏敬の念を抱くことを忘れてませんでした。命の連鎖は自然の法則なのです。

しかし、「受難物語」は、単に自然の法則に従って、新しい命を生かすため他の命が死ななければならないという、命の連鎖について語っているわけではありません。問題は、人間が、多分人間だけが、欲望のおもむくまま、自分の命だけ守ろうとして、命の連鎖で成り立っている自然の法則を破ることです。このため、歴史が始まって以来今日まで、地球上から戦争はなくなりません。

この世に属さない神の王国

ナザレのイエスは、このような人間の世界に平和をもたらすものは、天の神の支配を地上に確立することだと説き、天の王国、或いは、神の王国の実現を目指して活動した人でした。福音書は、

彼が神の王国とはどのようなものか、たとえ話を用いて語り、神の王国で生きる生き方について教え、そして、病気や差別に苦しんでいる人々を助けた活動を伝えます。それは、革命を起こす政治活動でも、新宗教を創始する宗教活動でもありませんでした。ローマ人総督のピラトに尋問されたとき、「私の王国はこの世に属していない」とイエスは答えています。

彼が目指した神の王国が何であったか、敢えて一言で言うと、「人の命を生かすためには、他の命が死ななければならない」という自然の法則に従って人間が生きる世界のことだと言えるでしょうか。この教えとこの教えを実践する彼の生き方に、この世の支配者たちは我慢できませんでした。彼らが支配するこの世の秩序がひっくり返されるからです。その結果、イエスは危険人物として逮捕され、裁判にかけられ、十字架刑によって処刑されました。

ヨハネは、このようなイエスの姿を、「世の罪を負う神の小羊」と呼びました。イエスが、自分の命を犠牲にすることによって、欲望のまま生きる生き方を捨てなければ人類は滅亡する、ということを教えたからです。

平安な喜び

4冊の福音書は、十字架上で絶命したイエスが最後に語った言葉として、それぞれ違った言葉を伝えます。マタイとマルコは、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と、神の王国を地上に実現できなかったことに、なお苦しむイエスを伝えます。ルカは「父よ、私の霊をみ手に委ねます」という言葉で、神の王国の実現を神の手に任せたイエスの心境を伝えます。そして、ヨハネによれば、絶命する前にイエスは「成し遂げられた」と言いました。神の王国の実現を伝える使命を果たした、平安な喜びを伝える、この言葉には、死んだ命から新しい命が生まれる「復活」の予感が響いています。

「受難物語」は、神の王国の実現を目指したイエスが、欲望が支配するこの世の秩序に裁かれ、死刑にされるまでの経緯をつぶさに描くことによって、彼が「人の命を生かすためには、他の命が死ななければならない」という普遍的な真理を実証したことを伝えます。これは、命の不思議な連鎖と継承について、痛みと喜びを同時に伝える感動的な物語です。さあ、一緒に「受難物語」を読み、聞き、歌ってみませんか。イエスが地上に実現することを目指した「神の王国」が見えて来るかもしれません。(石田友雄)

- 1. 5 イタリア・オルガン設置作業
- 1. 7 理事会・評議員会 参加者13名。
- 1.12,19,26 運営委員会 参加者4名、4名、3名。
- 1.14 春のシーズン開始
- 2. 2,9,16,23 運営委員会 参加者4名、3名、4名、4名。
- 2. 3 バッハの森・フェリス・オルガン科・合宿打ち合わせ 参加者5名
- 2. 9 業務実態調査(平成23年度文化芸術関係特例民法法人)茨城県生活環境部生活文化課による。武田順氏、浦田哲氏(文化振興担当)。
- 3. 3 理事会・評議員会 参加者10名。
- 3. 1,8,15,22,29 運営委員会 参加者4名、4名、4名、3名、4名。
- 3. 4 ピアノ・オルガン調律 河内克彦氏。
- 3. 4~6 バッハの森・フェリス・オルガン科合宿 参加者17名、13名、11名。
- 3.20 創立記念コンサート「受難物語」参加者46名。
- 3.21~4.11 春期休館
- 3.31 理事会・評議員会 参加者10名。

J.S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ研究
コラールとカンタータ (JSB)

- 1.14 顕現祭、クリスマス・オラトリオより「主よ、高ぶる敵がいきり立つとき」(BWV248/6) ;コラール「選ばれし者」。オルガン:J.S. バッハ「今やお前たちは報復した」(BWV248/64)、海東俊恵。参加者14名。
- 1.21 第333回、オルガン:J.G.ヴァルター「心より私は慕い求める」、笠間きよ子。参加者13名。
- 1.28 顕現祭後第1主日のためのカンタータ「愛しまつるイエスよ、私の憧れよ」(BWV32) ;コラール「捨てよ、わが心」。オルガン:J.S. バッハ「私の神よ、私に門を開いてください」(BWV32/6)、安西文子。参加者9名。
- 2. 4 第334回、オルガン:G.ペーム「大いに喜べ、おお、私の魂よ」、安西文子。参加者12名。
- 2.18 第335回、顕現祭後第2主日のためのカンタータ「私のため息、私の涙は」(BWV13) ;コラール「すべての業に」。オルガン:J.G.ヴァルター「すべて私が行うときに」、金谷尚美。参加者13名。
- 2.25 六旬節のためのカンタータ「私たちを維持してください、主よ、あなたのみ言葉の許に」(BWV126) ;コラール「み言葉の許に」、「主よ、与えたまえ」。オルガン:J.S. バッハ「み恵みにより私たちに平和を与えてください」(BWV126/6)、安西文子。参加者12名。
- 3. 3 第336回、オルガン:D.ブクステフーデ「私たちを維持してください、主よ、あなたのみ言葉の許に」、安西文子。参加者12名。
- 3.10 エストミヒのためのカンタータ「見よ、お前たち、私たちはエルサレムへ向かって上る」(BWV159) ;コラール「主の苦しみと痛みと死は」。オルガン:J.S. バッハ「イエスよ、あなたの受難は」(BWV159/5)、當眞容子。参加者11名。
- 3.17 第337回、オルガン:J.G.ヴァルター「主の苦しみと痛みと死は」、當眞容子。参加者9名。

学習コース

- オルガン音楽研究会 1.20/9名、2.10/8名、3.9/10名。
- オルガン・クラブ 2.3/3名、2.17/3名。
- コラール研究会 1.20/8名、1.27/5名、2.10/5名、2.24/5名、3.9/7名。
- クラヴィア研究会 1.20/3名、2.10/5名、3.9/4名。
- オルガン・クラス 1.20/6名、2.10/3名、3.9/4名。
- 入門講座:聖書を読む 1.14/5名、1.21/6名、1.28/5名、2.4/5名、2.18/5名、2.25/5名、3.3/5名、3.10/5名、3.17/4名。
- レチタティーヴォを歌う 1.14/5名、1.21/5名、1.28/5名、2.4/5名、2.18/4名、2.25/5名、3.3/5名、3.10/4名、3.17/4名。
- バッハの森・クワイア(混声合唱) 1.14/13名、1.21/12名、1.28/12名、2.4/14名、2.18/14名、2.25/13名、3.3/16名、3.10/10名、3.17/16名。
- バッハの森・ハンドベルクワイア 1.14/5名、1.21/4名、1.28/5名、2.4/5名、2.18/5名、2.25/5名、3.3/5名、3.10/5名、3.17/5名。
- オルガン&クラヴィコード練習 1.10/2名、1.11/1名、1.13/3名、1.14/1名、1.17/1名、1.18/2名、1.19/3名、1.20/1名、1.21/1名、1.24/2名、1.26/2名、1.27/4名、1.28/1名、1.31/1名、2.2/3名、2.3/3名、2.4/2名、2.7/3名、2.8/3名、2.9/1名、2.10/1名、2.11/1名、2.14/3名、2.15/2名、2.16/2名、2.17/2名、2.18/1名、2.21/2名、2.22/2名、2.23/2名、2.24/3名、2.25/1名、2.28/1名、2.29/2名、3.1/2名、3.2/2名、3.3/1名、3.6/1名、3.7/2名、3.8/2名、3.9/1名、3.10/1名、3.13/1名、3.14/2名、3.15/2名、3.16/1名、3.17/1名、3.21/1名、3.22/3名、3.23/1名、3.27/3名、3.28/1名、3.29/3名、3.30/2名。